School Counseling by the Support Team Method at the National University attached High School

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/40713

援助チーム方式によるスクールカウンセリング
— 附属学校での実践事例 —

School Counseling by the Support Team Method
at the National University attached High School

萱原道春
Michiharu　KAYAHARA

（要約） 国立大学と附属学校の連携として，援助チーム方式によるスクールカウンセリングを附属高等学校で行った事例を報告した。ともに心と力をあわせ，助けあって仕事をするという意味を込めて「協同」という概念を取り上げ，その観点から援助チーム方式の考察を行った。その結果，協同を促すには「メンバー各自がほっと息をつき自己開示の出来る場」を形成することが重要であることが示唆された。併せて，援助チームにおけるスクールカウンセラーの役割についても考察が加えられた。

Ⅰ はじめに

文部科学省のスクールカウンセラー派遣事業は1995年に始まり，早や20年近く経とうとしている。スクールカウンセラー（以下「ＳＣ」と記す）にとって，自身を活用して頂くには教師との連携が重要であることは言うまでもない。教師との連携について，それぞれのＳＣが今も模索をつづけているだろうと思う。

筆者（以下「わたし」と記す）は1997年よりＳＣとして学校心理臨床に携わるようになった。それまでは閉じられた空間での１対１の個人心理療法が主な活動の場であった。スクールカウンセリングに従事するようになって現在まで，教師との連携はわたしにとって常に最重要なテーマである。何故重要なのか，わたし自身のごく個人的な動機面から述べるならば，働く場の居心地の良さや働き甲斐に関わるからである。

ところで，手元の辞書（広辞苑五版）を引くと，「連携」とは“同じ目的を持つ者が互いに連絡をとり，協力し合って物事を行うこと”とある。そして，連携の類語である「協同」については，“ともに心と力をあわせ，助けあって仕事をすること”とある。この語義にしたがうと，働く場の居心地の良さや働き甲斐を表現するには，教師との連携という言葉よりも，教師との協同という言葉を使う方がより適しているように思う。学校心理臨床において教育相談のシステムを整えることは重要であるが，加えて，そこに人間同士の情緒的交流（心を合わせる）という要素が入らなければ，システムは形骸化し易いのではないだろうか。

ＳＣとしての最初の赴任校で，わたしは養護教諭と貴重な協同体験（萱原・木戸，2000）をさせて頂いた。個人心理療法のような治療構造など無い保健室の状況下で，養護教諭は生身の人格で転移・逆転移と真正面から格闘しながら生徒の援助をつづけていた。わたしは心理的読解技術の面では養護教諭に対してコンサルタントの役割を果たすことができたが，養護教諭の体当り的な迫力には到底及ばないと感じていた。カウンセラー態度について振り返る，貴重な体験を与えられた。

しかし，共同体としての学校全体との協同ということに関しては，今一つ満足感を得られず，「どうすれば学校全体としてＳＣをもっと活用して頂けるか」ということを，その後も模索していた。そのようなとき知ったのが石隈（1999）の提唱する援助チーム方式である。

援助チーム方式とは，保護者もチームの一員として迎え，教師・保護者・ＳＣの３者がチームを組んで，当該の子どもを支えていく方法である。援助チームは，特定の子どもに対する援助活動の核となって活動する「コア援助チーム」と，それを周囲から支える学内・学外体制的なチームから構成される。このように，「皆で一緒に力を合わせて，子どもを支えて行きましょう」という理念に，わたしは探していたものと出会った気がした。

平成26年3月31日受理

なお，石隈・飯田（2006）は，援助チーム方式の学校への導入を今後発展させていくための基礎資料として，学校におけるチーム援助の実態を調べている。その結果，援助チーム方式が重視する保護者の参加に関しては，小学校・高校では時々あるが，中学校ではたまにしかなく，概して保護者の参加は高くないことが明らかとなった。

ところで，援助チーム方式の背景にある学問体系は「学校心理学」であり，個人心理臨床の学問体系である「臨床心理学」との違いは，子どもの４領域（学習，心理・社会面，進路面，健康面）において，学校生活の総合的な援助サービスを行うという点にある。そこで，「援助チームシート」や「援助資源チェックシート」を用いながら，子どもについての情報が心理・社会面に偏ったり，学習面に偏ったりしないよう注意しながら，チームミーティングが進められる。これが，元来の援助チーム方式の進め方であり，その実践報告としては田村（2003・2008）等がある。

しかし，わたしはこれまで親しんで来た個人心理臨床のやり方を踏襲し 1) 子どもの心の動きを理解することに焦点を絞る，2) 自由連想法的に会話を進める，という方法で援助チームを行いたいと考えた。そして，それを試みるよい機会が訪れた。ＳＣを始めて６年後のことである。わたしの勤務する大学の附属高校養護教諭から連携を依頼され，臨床心理士資格をもつ大学教員３名が援助チーム方式を中核とした教育相談活動を行うことになった。全体的な活動の様態や相談実績に関しては，原田（2009）によって報告されている。

コア援助チームの基本的なメンバー構成は，保護者・担任教師・養護教諭・ＳＣの計４名であった。なお，養護教諭は，生徒本人への教育相談活動及び学内におけるコーディネイター的役割を担っていた。

援助チームの基本的な進め方はつぎのようである。月１回，午後５時以降にメンバーが会し，問題が解決するまで乃至は生徒が卒業するまでチームは継続された。開始を午後５時以降としたのは，このように継続的に一同が会することのできる場を設けるには，この時間帯しか無いからである。時間外労働となるが，担任教師からの不満は，わたしの知る限りではなかった。ただ，すべての援助チームに同席する養護教諭の時間的負担は多大であった。しかし，後ほど「Ⅱ事例-2. チームチンバー各人にとっての援助チームの意義」で記すように，養護教諭ご自身はこの活動に大きな満足を感じていらしたようである。

本稿では，附属高校でわたしが最初に行った援助チームの１事例を報告したい。イニシャルケースとして，共同体的協同の居心地のよさをわたし自身が知ることとなった記念碑的な事例である。なお，本事例に関しては，論文による公表の許可を保護者と生徒，そして教師から頂いているが，このように匿名性を一部犠牲にした形で公表することに踏み切った理由をつぎに記したい。

第１の理由は，附属学校の教育相談活動における大学との連携に関する研究が最近出始めており，その意義と必要性を鑑みたことである。第２の理由は，事例終了からかなりの歳月が経っており，歳月が匿名性を補ってくれるのではないかと考えた。

つぎに，第１の理由として挙げた附属学校の教育相談活動における大学との連携に関する研究について，先行研究をまとめておきたい。佐藤・小田切・木下（2006）が全国国立大学附属中学を対象に行ったアンケート調査によれば，大学教員による支援の内容は生徒本人に対するカウンセリングが多く，保護者や附属校教員を対象としたカウンセリングやコンサルテーションはあまり行われていない。相澤・尾崎（2013）は学校カウンセリングに関する国立大学と附属学校園との連携を研究するに当たり，予備調査として，附属学校園のＳＣと養護教諭を対象に聴き取り調査を行った。その結果，ＳＣの導入経緯や活動様態は各学校其々の事情やニーズが反映されていたことから，公立校であろうと附属校であろうと，ＳＣは学校要因に応じて活動の重点を柔軟に変えていくことが必要であろうと述べている。しかし，大学教員がＳＣとして附属学校園と協力する場合には，学校園側のニーズに合わせるだけでなく，活動方針に対する積極的提言を行うことも可能である。それが受け入れられるか否かは学校園の状況に依るが，両者の目指す所が一致した時は，同一組織に属する者たちの強いパートーナーシップが発揮されるのではないかと考える。つぎに荒木ほか（2013）は，国立大学附属学校園の養護教諭とＳＣを対象にア

ンケート調査を行い，附属学校園の教育相談活動を充実させるには，養護教諭がコーディネイター役割を担うことが重要であることを示唆している。

ここで，本稿の目的をまとめるとつぎのようである。援助チーム方式によるスクールカウンセリングの事例報告はまだ僅かしかない。事例の蓄積に寄与すると共に，協同という観点を中心に援助チーム方式に関する考察を行いたい。

Ⅱ　事例

「1. 事例の経過」を記した後に，事例終了後に各チームメンバーに対してインタビューを行った「2. チームメンバー各人にとっての援助チームの意義」を記す。

1．事例の経過

（概要） 援助対象となったのは高校1年生の女子(以下「A子さん」と記す）で，1年次9月より不登校状態となる。併せてリストカット，摂食障害等の問題により医療機関にて投薬治療を受けるが，家では「薬も合わなくて死んだような状態」（母親言）であった。また，「担任の家庭訪問は控えて欲しい」という母親からの要請で，学校と家庭との連携が絶たれた状況下で，チーム活動が始まった。卒業するまでの2年間半に計26回のチームミーティングが開かれた。親子関係の経過は，一時短期入院するに至った子どもの攻撃性の発露を親がしっかりと受け止めたことを分岐点として，最終的には「びっくりするほど素直になった」（母親言）へと変わって行った。家族としての様相も，「個々人が頑張っている家族」から「支え合う家族」へと変化した。

コア援助チームのメンバーは，保護者・担任・養護教諭・ＳＣの4名であり，それを管理職として副校長が強力に支えて下さった。本事例を含め，すべてのチームミーティングが開かれる日の職員朝礼では，その日の行事予定として全教職員に知らされ，また忙しい業務の合間に副校長自らチームのために毎回菓子を買って用意して下さった。その菓子と，コーディネイターである養護教諭が入れて下さった茶を食しながら，毎回のチームミーティングは開始された。なお，担任の都合がつきにくいときは「無理をしないように」と伝え，保護者・養護教諭・ＳＣの3名で行った。

#1（x年度11月）

保護者に加わって頂く前に，コア援助チーム予定メンバーの担任（男性）・養護教諭・ＳＣによる打ち合わせに，校長（大学教員）・副校長にも参加して頂いた。養護教諭が準備した教育相談個人カードが配られ，状況把握と心理的問題の理解を中心に話し合われた。

その中で，副校長が昔担任として関わった不登校の女子生徒のことが語られた。家庭訪問の折，激しい退行状態の中で1カ月以上風呂に入っていない生徒をおんぶして家の周りを歩いたエピソード，そして退行状態が劇的に改善して無事大学進学を果たし，その後母親となった生徒と再会できたこと等が語られた。抑制された表現ではあったが，副校長の心理的な事柄に対するご関心と，体当り的な熱意が伝わって来た。

#2（x年度11月）

今回から母親が加わってコア援助チームがスタートする予定であったが，当日の朝「A子を残しては行けない」と母親から連絡が入る。チームミーティングは予定通り開かれた。「家庭訪問をしたが，本人が緊張して会えなかった。そうそう簡単に復帰できるような状態ではない」といった担任の話の最中に，母親からA子さんの状態像を記したファックスが届いた。理知的な文面であった。「客観的すぎる」と担任は漏らしたが，的確で詳細なその記述に，チームパートナーとしての母親の力をＳＣは感じた。

その後，メンバー同士の紹介の意図であったと思うが，養護教諭から，担任の趣味が菓子作りであることが話された。男性担任のそのような趣味を知って親近感を抱きながら，ＳＣは担任に向けてつぎのような提案を行った。＜シュークリームがA子さんとのつながりの糸口になるかもしれない。A子さんとクラスの生徒有志を誘って『先生のシュークリームを食べたい会』を作ってはどうか。母親に今日の話し合いを伝えて，再度，来室するよう促してみてください＞。

#3（x年度12月）

母親の代わりに父親が参加する。「最近『どうして生きるのか？』とA子が聞いて来る。おざなりに返答すると，軽蔑したような目で反論してくる。自分も高校生の頃そのような問題を考えたことはある。父親（A

子さんの祖父）がモーレツ社長で，その生き方に反発を感じていた」と語る。

その話を受けて担任が発言する。「Ａ子から問われても，あまり考え過ぎないようにと，アドバイスしたらどうだろうか」。＜それはあまり有効ではないと思う＞とＳＣが発言する。父親が言う。「わたしもそう思う。ＳＣが言ったことは，妻や私が考えていることと同じなので，納得がいく。しかし，どうＡ子に接したらいいものか？」。＜親が自分自身と向き合うことが問われているのだと思う＞とＳＣが答えると，父親は家庭内の状況について触れた。「最近家庭の中はアチコチで衝突が生じている。私と父親，そして妻と母親との間で」。

#4（x 年度 12 月）

この回はコア援助チームではなく，家庭科教諭とＡ子さんとの間でメール交換が始まったということで，家庭科教諭・養護教諭・ＳＣの３者で話し合った。

#5（x 年度 2 月）

担任・養護教諭・ＳＣの３者で話し合う。まず養護教諭より，3 学期に入ってＡ子さんの保健室登校が始まったことが報告される。その後，担任から「年末にクラスの女子生徒数人とクリスマス会を企画し，Ａ子さんを誘ったら参加したので，皆でわたしが焼いたケーキを食べた」ということが報告された。

#6（x 年度 2 月）

母親が初めて参加する。以降，保護者の参加はすべて母親である。母親から家でのＡ子さんの様子が報告される。「お昼前に学校へＡ子を迎えに行き，家へ帰って一緒に昼食。その後わたしが買い物に行こうとすると，Ａ子も一緒について来た。Ａ子が色々と取り仕切り，私は『ハイ，ハイ』と従った。Ａ子が小さい頃，わたしはかなり厳しい育て方をしたのだけど，最近はゆるい態度で接している。わたしが，そろそろ家の仕事をと思い始めると，Ａ子の様子がおかしくなった。いつものように自室へ行ってリストカットをしそうな様子。そこで二人で話をしているうちに，私もついカーッとなってしまった」。

その後，「こんなこと，話してもいいものかどうか」と母親が言うので，ＳＣが＜どうぞ，話して下さい＞と促すと，婚家の３世代家族間の葛藤が語られた。また，長女であるＡ子さんの下に二人の子どもがおり，母親の愛情獲得をめぐるＡ子さんの同胞葛藤についても語られた。「私はお母さんを守らなければならない，とＡ子が言うことがある」という母親の発言に対応して，養護教諭から保健室におけるＡ子さんのつぎの言葉が報告された。『お母さんは，お母さんになって欲しい所で子どもになり，欲しくない所でお母さんになる』。

＜次回は･･･＞というＳＣの言葉に対し，母親は「来れたら，来ます」と答える。＜是非来て下さい＞とＳＣは促した。

#7（x 年度 3 月）

母親から家でのＡ子さんの様子が報告される。まとめるとつぎのようである。母親にくっつくなどの退行はなくなった。代わりに暴言など，攻撃性が出現。2 月下旬からＡ子さんはダイエットを始めるが，3 月に入ってから過食・嘔吐が再発した。再発したその日にはつぎのような出来事があった。母親がいつも通り昼ごろ学校へＡ子さんを迎えに行った。気が立った様子のＡ子さんと「昼食をパンにするか餅にするか」といった些細なことで喧嘩になる。「死んでやる！」とＡ子さんは言って，学校へ引き返した。保健室で養護教諭がＡ子さんの相手をする。その夜，過食・嘔吐があり，Ａ子さんは吐いた物を母親に見るよう迫った。

以上の内容が母親から報告されたが，Ａ子さんが攻撃的になったことに関して，母親は「それも良いことだと思っている」と語った。

その後，担任から学校での様子が報告される。「進級できるよう，その措置を他の教員にお願いして回っている」との言葉に，母親は「どうぞよろしくお願い致します」と深々と頭を下げた。

つづけて担任は，Ａ子さんから届いた手紙を紹介した。手紙の最後は『プレシャーに負けそうになるけど，見守っていて頂ければ幸いです』と書かれてあった。

＜しっかりとした文章を書きますね！＞とＳＣは感想を漏らした後，他の３人のメンバーに向けてつぎのように問うた。＜皆さんだったら，どのような返事を書きますか？わたしだったら『現実のハードルを一緒に越えて行こうね』と書きたい＞。この時ＳＣの胸中にあったのは，チームの協同関係が芽生えはじめたことへの感動であった。

最後に母親が言った。「夫には私たち核家族の家長

になってもらいたい」。

#8（x 年度 3 月）

Ａ子さんの動きが激しくなって来た為，臨時のチームミィーティングが開かれた。養護教諭から保健室でのＡ子さんの様子が報告される。「今日，保健室でわたしが他の保健室登校の生徒の相手をしていたとき，僻んだのだと思うが，Ａ子が筆箱を投げつけた。そして，飛び降りようと屋上へ行く素振りを見せた。その後『お母さんと間違えそうになった』とＡ子は言った」。

養護教諭も母親もその意味を十分承知していたと思うが，Ａ子さんの心理的動きをチームに示す役としてＳＣは＜学校でもわがままを出せるようになった＞と言葉を添えた。

一方，母親からは，Ａ子さんが母親の手伝いを始めたことが報告された。そして母親は言った。「下の子と違ってＡ子は素直に甘えられず言い方もきついので，私もついカーッとなってしまう。でも，先日わたしの誕生日にＡ子がくれたお祝いカードには『いつかは親孝行するから』と書いてあった。嬉しかった」。

つづけて，母親の話は自身の母親との関係に及んだ。＜お母さんも，お母さんのお母さんも，一人で頑張り過ぎたのですね＞と，ＳＣは言葉を返した。

#9（x 年度 3 月）

年度末の締めとして，学内関係者による本事例の経過報告会を開催した。参加者は，副校長・担任・家庭科教諭・養護教諭・ＳＣである。

報告を聴き終えて，副校長が仰った。「家庭というパンドラの箱を開けずに済むものならそうしたかったが，やはりパンドラの箱を開けざるを得ないですね」。＜一旦開けたなら…＞ とＳＣが言葉を添えると，「もう後戻りをすることはできない」と応えられた。

#10（x+1 年度 4 月）

Ａ子さんが 2 年次に進級して第 1 回目のコア援助チームである。担任は 1 年次と同じ教員が引き継ぐ。

母親からは，Ａ子さんが病院で暴れたエピソードと，その一方で，母親の布団に入って甘えて来るエピソードが報告された。前者のエピソードについては，つぎのようである。母子同席の診療でＡ子さんは医師から「お母さんによると，最近安定してきたようだね。そろそろクラスに戻るようにしなければ」 との言葉を受ける。診察室を出たところで，母親に向かい「安定してるなんて，そんなの嘘！くそばばー」と言ってソファを壁に投げつけた，とのことであった。なお，リストカットが無くなったということも併せて報告された。

つづけて養護教諭から，学校でのＡ子さんの様子が報告された。「始業式の日からクラスに数時間出ている。担任とも話ができるようになり，『現在の自分の状況を担任からクラスメートに伝えてほしい』と要望した。担任によると『まったく元の状態に戻ったように見える』とのことだった」。

最後に母親が言った。「暴れるようになったのは，いいことだと思う。夫とも励ましあって，とことん受け止めていこうねと話している」。母親の雰囲気がずいぶん柔らかくなったと，ＳＣは感じた。

#11（x+1 年度 5 月）

間近に迫った修学旅行は，Ａ子さんの了承を得て，母親も同行することになった。母親との打ち合わせのため旅行会社の方に来て頂き，チームミィーティングの冒頭は両者の打ち合わせとなった。

その後，母親から，夫や自身の母親に向けて，これまで語ったことのない事柄を率直に話すことができたことが話される。「今回のことで，家族皆が成長した」と母親は言った。ただ，Ａ子さんの自己誘発嘔吐はつづいており，「胃酸で爪もダメージを受けている。何とかしてやりたい」と母親は案じた。

【この回の後，6・7 月のチームミィーティングは休会となった。理由はつぎに記すとおり。】

#12（x+1 年度 8 月）

養護教諭からＳＣに休会中の出来事が詳細に報告された。この間のＡ子さんの様子をまとめると，つぎのようである。修学旅行に参加することはできたが，「つぎの目標がもてない」という不安から，養護教諭や母親の些細な言動を捉えて「私のことが心配じゃないの！」と駄々をこね，修学旅行中は養護教諭に対して「窓から飛び降りる」と言い放ち，修学旅行から帰ってからは，家の 2 階から本当に飛び降りてしまった。

危ないので，養護教諭と母親が相談して，短期の入院をさせることになった。だが，入院中もＡ子さんは学校へ通い，病棟では同年代の子たちとすぐ仲良くなって，「わたしの居場所はここしかない」などと言って

いたそうである。

この出来事を機に，A子さん自身の希望もあって，学外の公的機関でカウンセリングを受けることになった。

#13（x+1年度10月）

養護教諭から「9月は教育実習期間中で，実習生を話し相手にA子さんはご機嫌だった」と報告される。

つぎに母親から家でのA子さんの様子が，6月頃まで遡って報告された。「6月に自分史を書きあげた。7月に入ると『ポッカリ穴が空いているけど，器ができた』と言った。最近，わたしと夫に向かって『こんなに悪い子なのに，どうして怒らないの？』」と言った。事件がある度に，一つ一つ解けて行くように思う」。

#14（x+1年度11月）

母親から「A子はカウンセラーやドクターにも心を開き始めた。カウンセリングでは笑い声も聞こえる」と報告される。

その後，母親自身のことに話が及んだ。「夫は仕事で忙しいので，私が母親と父親の両方の役をしていた。A子が生まれた時は，大海に放り出されたような気持ちだった」「元来わたしは自分で出来ることはサッサと一人でやってしまうタイプ」「夫は変わってきた。A子のおかげで，夫婦の関係を作り直すことができている」。

#15（x+1年度12月）

母親は「家族の皆が淋しかったのだと思う。でも今は夫婦の意見は一つだから。夫も色々と大変だったのだろうと思う」と語った。

担任からは，コア援助チーム方式に関する発言があった。「こうやって，母親の話も直接聞け，担任は蚊帳の外に置かれた思いを持たずに済む。自分に出来るのは進級のため各先生にお願いをして回ることぐらいだけど，とにかくA子が無事卒業してくれればいい。うちの学校も，昔はくさいものには蓋をしろ的雰囲気があったが，今は変って来ている」。母親は「ありがとうございます」とお礼を言った後，「ほかの学校もこんな風だったらいいのに」とつけ加えた。本音で語り合えるメンバー同士の安心感が伝わって来た。

#16（x+1年度1月）

養護教諭から「友達と喧嘩をして12月中は鬱状態だった。かなり取り乱していたが，今は平静を取り戻している」と報告があった。

その後は進路についての話となった。この日は雪の深い日だったが，副校長が雪の中買って来て下さった菓子を皆で食べながら，ミーティングは続けられた。

#17（x+1年度2月）

養護教諭から「クラスへはほとんど行っていないが，欠席はほとんど無い。友達がいなくて淋しそう。でも，最近はそんな様子がそのまま自然に表れる」と報告される。

母親からは，家人との関係も自然な態度になって来たことが報告された。

#18（X+2年度4月）

A子さんは3年生に進級した。担任交代があり，新しい担任がチームメンバーとして参加する。

担任から「A子がショートホームルームに参加できない時は，後で打ち合わせをすることにした。『友達との関係のことを思うと，クラスに入れない』とA子は言っていた」と報告がある。

それを受けて，養護教諭から「実は，友だち関係のことを巡って母親に八つ当たりをし，2階からまた飛び降りた」という報告があった。だが，1回目の飛び降り事件の際の緊迫感はもうなかった。A子さんの心をチーム全員が理解し一緒に支えてきた安心感がメンバーの胸中にあったと思う。

つづいて，母親の持参したA子さんの詩が朗読された。『自分を好きでいれる人へのコンプレクス。…自分をダメだとばかり思っていると，どんどん落ち込んでいくから，それはやめよう。自分を信じよう。…求めるものは，穏やかにしていれば手に入る。…ぼくたちを認めてくれる大人たちがいる。…小さい頃のお母さんとのいい想い出』。

最後に養護教諭から，新しくメンバーとなった担任の紹介が行われる。「昔は鬼の○○だったが，今は仏の○○。子どもが生まれて変わった。近く2人目が生まれるそうです」。

#19（x+2年度6月）

母親から医療機関及び個人カウンセリングにおけるA子さんの様子が報告される。「ドクターとA子の間に信頼関係が築けた。診療中も笑い声が聞こえる。カウンセリングは続けて通所している。そこで話された

ことは知らない。A子の秘密の場所」。つづけて「A子は『高校の3年間は無駄ではなかった』と言っている。それと，最近すごく淋しい顔を見せるようになった」ということが報告される。

母親の報告を受けて担任が言う。「クラスへはテンションを上げて無理して入ろうとしている様子がよくわかる。そのことはクラスメートも察している」。

養護教諭が言う。「クラスの女の子たちはさりげなくA子さんを気遣っている。すごくやさしい子たち」。

#20（x+2 年度 7 月）

養護教諭から「試験期間中は調子が悪かった。鬱だ！と言って，わたしに駄々っ子みたいにごねた」と報告がある。

母親からはつぎのような報告があった。「退院してから現在まで確実に良くなっているとドクターが言ってくれた」「『これまでは落ち込むとリストカットしたり吐いていたけど，今は鬱の状態でおれる』とA子が言った」「祖父母が変った。柔らかくなった」。

#21（x+2 年度 8 月）

養護教諭から「スポーツ大会や歌大会の行事に参加できた。『円陣を組めて嬉しかった』と母親に話したそうです」と報告がある。

母親からの報告。「全てをわたしにぶら下がらなくても，一人で居れるようになった。小学校 3 年生ぐらいになった感じ」「A子の目が険しくなった時こう言った。『母さんも，もうこれまでのような元気は出ない。でも見捨てることなんてしないからね。A子ちゃん，危ない眼になって来たから，お薬飲んで寝て頂戴』。その言葉掛けで済むようになった」。この日の母親は少し元気がなかったが，尋ねると茶毒蛾に刺されて暫く寝込んでいたということだった。A子さんと下の子が家事を代わってくれたということであった。

つづけて母親からは家族全体の状況が話された。「父親の言うことにA子も素直に従うようになった。父親が父親として機能するようになった。子どもに乞われて，一緒に政治の話なんかもしている。きょうだい仲も良くなった。これからも家族皆で支えあって，困難を乗り越えて行きたい」。

担任からは，学業に関する今後の方針が語られた。「A子に『模試がダメでも，落ち込まずに徐々にやって行こう』と言った。志望校を受験することができれば，不合格であったとしても，自信がつくと思う」。

#22（x+2 年度 9 月）

母親から「A子は，びっくりするほど素直になった」と報告がある。A子さん曰く，『この1ヶ月で色々なことが動き出した。教室に居ても楽だった。自分の気持ちの持ち方の問題だと分かった』とのことであった。

その話を受け，養護教諭から「学校でも自分の気持ちをコントロールすることができるようになった。1年生のある女子生徒を妹のように可愛がっている」と報告がある。

つづけて，母親から自分自身と家族の状況が話された。「A子に対して私は怒りっぱなしだったのだと思う。わたしに余裕がなかったから。今は自分に対する自信もできた。先日，祖父母とわれわれ夫婦で墓地の見学に行ってきた。祖父母も丸くなった。夫のいい分に折れてくれた」。

#23（x+2 年度 10 月）

養護教諭から「教室でテストを受けることができた。その後一時波があったが，テスト返却のときも教室に参加できた。以前と比べると波は小さくなった」と報告がある。母親は「ここまで良くなるとは思ってなかった」と勉学の進展を喜んだ。

つづけて，養護教諭から『保健室の仲間皆に支えられている』というA子さんの言葉が報告された。

#24（x+2 年度 11 月）

養護教諭から「A子は本当に成長した。センター試験の演習を受けることができた。ホームルーム等にはきちんと出席している。保健室でも，ベッドを使う時はきちんとわたしの了解をとってから，そうしている」と報告がある。

母親からは「本人の気の済むように，センター試験は受けさせるつもり。ダメだったら地元の大学へ行かせようと思う」ということが話された。

#25（x+2 年度 1 月）

養護教諭から「センター試験を無事受けることができた。当日A子は教科の女性教諭にお礼を言いに行った。成長した姿に先生はウルウル。また，母親にもお礼を言ったそうです」と報告がある。

母親から家での様子が報告される。「センター試験

２日目の夜，父親が『もう少し安定するまで，家を出て他所へは行けないよ』とＡ子に諭した。不満はあるようだったが，父親の言うことには従っていた。わたしには八つ当たりしたけれど。今の家に嫁ぎ，以前は自分で生きているという感覚がなかった。夫も自分のことで精一杯で私のことまで気に掛ける余裕がなかった。今は二人とも強くなれた」。

#26（x+2 年度２月）

最終回ということで，副校長にも参加して頂いた。

ＳＣが＜我々チームを支えて下さった副校長先生にお礼を申し上げたい＞と切り出した。

副校長がつぎのような話をして下さった。「いい子であったＡ子さんは，自分自身の人生がわからなくなったのだと思う。自分も中学の時そうだった。グレ始めたわたしの頭を何度も叩きながら，支えてくれたのが和尚だった。『煩悩，これ人生』。インドの僧クマラジュの生き方に共感を覚えた。今回，この言葉を学内新聞に載せた。学校でできることなど，ほんの僅かだ。家庭が大事なのだ」。

そのお話しに感動して，母親が涙ぐんだ。

ＳＣもつぎの言葉を述べさせて頂いた。＜附属高校は競争に勝つことを第一義としているのではない。自分自身が納得して決めたことに全力をあげて取り組むことを尊重している。今回，お母さんも，自分の家庭を自分自身の力で築きあげたのだと思う＞＜チームメイト，相棒が頼もしいので，Ａ子さんの状態が大変なときもカウンセラーとしてのわたしは気が楽だった＞。

（その後の経過）

１年浪人した後，Ａ子さんは親元を離れて他県の大学へ無事進学した。高校３年間の苦しいが貴重な模索の末，自身が導き出した進路へと進んで行った。

２．チームメンバー各人にとっての援助チームの意義

チームを解散した後，メンバー各人にとっての援助チームの意義についてインタビューを行った。母親に対しては半年後，他のメンバーに対しては１年半後に行った。

（母親）

最初に夫が行ってくれて，「担任の先生も真摯な態度で受け止めてくれたよ」と報告してくれた。それを聞いて私も来るようになった。

この場は私にとって，２つの意味があった。ひどい状態を共有してもらえるということと，あと一つは，Ａ子を卒業させてもらいたい一心だった。前者に関しては，ひどい状態を話すことに葛藤もあった。完璧でなければならない，弱さを見せられない，という私の性格があったから。両親からそのように育てられてきた。

Ａ子を附属幼稚園に入れて感じたのは，保護者の母親たちは皆欠点を隠すのに必死だということだった。

私のこのような性格からＡ子には申し訳ないことをしたと思っている。改めて子育てをし直す中で，私の中で育っていなかった部分が鍛えられたと思う。

（1，２年次の担任）

援助チームは教師にとって大変ありがたい。

初任の時，不登校生徒をもった。それ以来，このような生徒に対して熱意をもってやって来たが，素人が熱意だけで手を出してもダメなんだということがわかった。ＳＣのお墨付きをもらった方針に沿って，自分たちができることをやる。これは精神的にものすごく楽だった。最初のうちは，こんなまどろこしいことをしていていいのか，と思ったりもしていたが。

これまでは「担任のせいだ」「養教が甘い」など，他の教員から言われ，進級させる際は薄氷を踏む思いだった。

親が学校に警戒心をもたないということも，大きなメリットだと思う。これまで，往々にしてそのようなことがあった。先日，問題行動を起こした生徒の保護者に学校に来てもらった。我々としてはそのようなつもりはまったくないのに，親は「学校に呼び出しを受けた」と感じるみたいだ。でも，ＳＣが居るとそのようにはならない。

保護者の話を聞くことで，自分の子育てを振り返る機会にもなった。

（養護教諭）

Ａ子さんが附属高校に入学するとき，母親が相談にやって来た。担任とわたしが同席したが，結局は個々バラバラに対応することになった。

以前は「保健室で甘やかしている」という声が聞こえたが，今は一切そのような声が聞こえなくなった。すごく働き易くなった。今では，出席日数が足りない

場合はどう対処するか，教務担当がそのマニュアルまで作っている。職員会議では担任が方針を説明している。

教育相談は養護教諭の仕事の重要な一つであると考え，これまでカウンセリング研修会にもよく参加して来た。しかし，今回ＳＣと同席することで，はじめて実質的にカウンセリングを学ぶことができた。

養護教諭としての仕事もあと僅かだが，最後をこのような形で迎えられたことを感謝している。

（副校長）

最初にインタビュアー（ＳＣ）からつぎのような自身の考えをお伝えした。＜大学と附属学校という組織対組織の関係で連携させて頂いたというより，個人対個人のつながりという感覚の方が強かった。システムができれば，それなりに歯車は動いていくだろうが，熱意は個人的つながりからしか生まれないのではないかと思う＞。

そのとおり。組織運営の今の状況は「変革，変革」と表面だけのシステム作りに奔走しているが，わたしは，人間同士のつながりを大事にしていた昔のシステムへと附属高校を戻して来たつもりである。退職後，この路線を受け継いでもらえるかどうかは，後進に委ねるしかないが。

教育相談は，自分を裸にしないと対処できない仕事だ。

附属高校に勤めてから，また大学時代も，周囲と違う自分を感じて来た。自分には欠落した部分があるとの意識。それを埋めようとする思いがエネルギーとなって来たように思う。

中学時代の和尚をはじめ，大学の恩師，下宿屋のばあさんなど，様々な人から私がしてもらったことを，生徒たちにして来たのだと思う。こんな自分でも認めてくれる人がいるということが驚きだった。

人間は変る。だが，変るには10年，20年の単位が必要だ。自分を通してそのことを知ったので，生徒に対してもそのような目で見て来た。

Ⅲ 考察

協同という観点を中心に，援助チーム方式ついての考察を行いたい。

1．協同を促す「ほっと息をつき自己開示の出来る場」

佐藤（2006）は，“ＳＣが十分に力を発揮するには，ＳＣ自身が学校に居場所を見いだし，教師と相互理解・相互受容し，いかに協働できるかに鍵がある”との問題意識に立って，教師・ＳＣ・生徒か保護者または両者との合同面接をおこなった複数の事例を報告している。本稿で取り上げた援助チーム方式とほぼ同義の取り組みである。そして，つぎのように述べている。“職業・役割という仮面をつけながらも，その内面をどこかでほっと出せる，ある程度心を許し合える関係で成立できた協働は，合同面接という形での生徒・保護者支援に結実できたと思う。どのような形であっても，対人支援は，人と人とのつながりであると再確認した”。ここで指摘されているように，援助チームにおける協同が成立するには，その場が，メンバー同士がほっと息をつき自己開示の出来る場でなければならないと考えられる。

さて，教師同士がほっと息をつき自己開示の出来る場，ということに視点を移してみれば，教育相談の領域においては，むしろ息をつめ緊張してしまう場になることもあるようである。清水（2011）は，現職教員として大学院で臨床心理学を学ぶ中で，教師としての自身の歩みを振り返り，つぎのように記している。少し長くなるが引用したい。“筆者は，小学校６年生のＲと出会い，中学卒業までＲと関わることになった。出会った当初は，お互いが相手の出方を探り，ぶつかり合うばかりの日々だった。対人関係において，それまでの筆者は相手と深く関わることを避けていた。それは，自分に自信がもてず，自分の未熟な部分を他者には見せたくないという気持ちが強かったからだ。しかし，自分のすべてを筆者にぶつけてくるＲには，そんな筆者を受け入れてはもらえなかった。Ｒの思いに寄り添い，真の援助をするためには，ありのままの自分でＲと深くつながっていくしかなかったのである。また，Ｒのことで筆者が教育相談の場を求めたことはなかった。筆者にとって教育相談の場は『居心地のいい』ものではなかった。表面的には穏やかで仲がいい教師間であったが，安心して自分をさらけ出せるほど深い関わりではなかった。それは，都合のいい面ばかりを

周囲に見せてきた筆者にも原因があったと言える”。

ここに記された子どもと教師の関係には，“教育相談は，自分を裸にしないと対処できない仕事だ”（副校長インタビュー）という言葉が当てはまる。このように，人の心に深く関わる教育相談活動では教師の本音や率直さが試される。そして，そのような裸の自分の関わりを共有してくれる他の教師が居たなら，担任は心強いであろう。

つぎに，保護者がチームの一員となることの意義を，協同という観点から考えてみたい。日常の社会的対人関係はある程度の心的距離を保って営まれるのが通常である。教師同志の関係，あるいは教師とＳＣの関係も例外ではないと言ってよかろう。時には心的距離を縮めたいという思いが生じることもあろうが，暗黙の社会的対人関係の交流ルールを破るまでにはなかなか至らない。

しかし，其処に問題を抱えて切羽詰まった人が加わるとどうであろうか。問題を解決するには，その人は深い自己開示をせざるを得ない。援助チームにおいては保護者がその立場に立つことになる。つまり自己開示の口火を切る役である。その話を他のメンバーが一所懸命受け止めようと努める中で協同の雰囲気が醸成され，結果として他のメンバーの自己開示も促されるのではないかと考えられる。本稿での“わたしだったら『現実のハードルを一緒に越えて行こうね』と書きたい”（#7）というＳＣの発言が，それにあたる。つぎの担任の言葉も同様ではないかと考えられる。“自分に出来るのは進級のため各先生にお願いをして回ることぐらいだけど，とにかくＡ子が無事卒業してくれればいい。うちの学校も，昔はくさいものには蓋をしろ的雰囲気があったが，今は変って来ている”（#15）。

わたしの関わった他の援助チームでのことだが，「じつは子育てに失敗して…」という担任の自己開示もあった。このように，援助チームではメンバー同士の自己開示，そして冗談なども交えながら，個々のメンバーはどこかで自身の内面を吐露し，受けとめ合いながら，ほっと息をつくことの出来る居心地のよい場をつくり出していた。援助チームが開始されるのは午後 5 時以降であった。時間を気にせず，またひと気も少なくなった校舎の中で，用意して頂いた茶菓を食しながらゆったりと流れる援助チームの時間は，わたしにとってはなんとも贅沢な時間だった。

ただし，わたしの関わった援助チームのすべてがそうだったわけではない。心理的な問題について話し合うことのできない，あるいは自己開示のできない保護者もいらっしゃった。そのような場合は，チームは中断するか，実質的には教師・ＳＣの打ち合わせ会の様相を呈した。

２．援助チームにおけるＳＣの役割

援助チームにおいてＳＣが取った役割について考察したい。大きく分けると，つぎの二つの役割があった。1）読解技術を基にチームに航海図を示す航海士の役，2）保護者の話を中心として，各メンバーの話を心の中で受けとめながらも，応答は控え目にして，メンバー同士の相互作用を見守る役，である。

まず，1）に関して説明したい。読解技術・応答技術・面接者態度というカウンセラーに必要な技量の中で，読解技術は所謂専門家らしさが最も前景に出る技術である。具体的にいうと，一見バラバラのデータをつなぎ合わせて一つのまとまった心的全体像を描き出す作業である。一般に心理的理解と呼ばれている。春日井・大日方（1998）の調査によると，心理の専門家にスーパービジョンを受けて担任が良かったと評価した上位 2 点は，見立てと方針であった。見立てとは，精神医学的診断を除くと主に心理的理解のことを指している。わたしの関わった援助チームでの経験を述べると，ＳＣが心理的理解の青写真を示せば，学習や進路に関する事柄などを含む個々の具体的方針については，その大部分をメンバー自身が考え出していた。ＳＣは「なるほど！」とか「そこまでするのか！」と感心しながら傍らで話を聞いていた。保護者に対しては，子どもに対する接し方についてＳＣからアドバイスを差し上げることが時々あった。

心理的理解に関することで，ひとつ付け加えたい。学校と家での子どもの様子が教師と保護者によって報告され，その際に「そう言えば，家でも…」，あるいは逆に「そう言えば，学校でも…」というように，豊富で多面的なデータが，しかも関連づけられながら報告されて行くので，心理的理解がし易かった。

つぎに，援助チームにおけるＳＣの役割の 2）につい

て，若干の説明を加えたい。1対1の個人心理療法場面では話を受け止める者はカウンセラー一人しか居ないので，相槌をはじめとして応答はすべてカウンセラーが返さなければならない。しかしチームで行う場合は，チーム全体の相互作用が活性化するためにも，ＳＣの応答は控え目にしておいた方がよいのではないかと思う。その分，カウンセラーとしての役割意識が薄まり，代わりに共同体の一部としてそこに存している感覚が強くなるように思われる。

以上の考察を総合するため，神田橋（1990）の「抱え環境」という考えを引用したい。これは，医師とその他の医療スタッフから構成される病院臨床での実践から導き出された考えであるが，学校臨床にもそのまま当てはめることができる。“抱え環境となるには，専門家でなくてもよいのである。必要なのは，利他の姿勢を持つ人であることである。（中略）ただし，主体のもがきが深刻な場合，抱える関係を作成・維持する相手方の作業はしばしば難行し，専門家としての技術を必要とする。そのさい有用な専門技術の首位は，深刻なもがきが示す複雑で異様な外観の奥を読み取る診断の技術である。的確な「読みとり」に導かれさえすれば，専門家でなくとも，抱え関係の作成・維持の作業をおこなえるのである”。

援助チームは，まさにこのような抱え環境として機能したと考えられる。そして，チームメンバー各人も又，援助チームという協同的環境の中で抱えられていたように思う。

３．今後の展望

心理的な問題が解決するには相応の時間が必要である。したがって，個人心理療法と同様に，援助チーム方式が本来の効力を発揮するには，継続的にチームミーティングを開催することが理想的であると考える。しかし，ＳＣ派遣事業の制度下におけるスクールカウンセリングでは，時間設定の問題上，それは大変難しい。

だが，保護者・教師・ＳＣが一同に会して面談することの有用性を，附属高校における実践を通してわたしは確信したので，継続性は低くても状況が許す限り援助チーム方式を取り入れて頂けるよう，状況を見極めながら，教師の方々にお願いしている。そして，少ない回数のチームミィーティングであっても，本稿で示したような協同関係は芽生えてくるように感じている。

具体的な今後の展望を立てることはまだできないが，引き続き援助チーム方式による学校心理臨床活動を進展させていきたいと思う。

最後になるが，本稿をまとめている最中に奇しくも，今は附属高校を退職されている養護教諭と再会する機会があった。その折に，Ａ子さんが最近ご結婚なさったことを伺った。わたしとＡ子さんが直接お会いする機会はなかったが，この場を借りて，ご結婚をお祝いすると共に，公表への許可を頂いたことに深謝致します。

文　献

相澤直子・尾崎啓子 2013 学校カウンセリングに関する国立大学と附属学校園との連携：スクールカウンセラーと養護教諭を対象とした聴き取り調査 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要，(12)，91－98.

荒木史代・高柳佐土美・木次昭子・石井夕貴・斎藤理砂子・中澤潤 2013 附属学校園の教育相談システムの構築に向けた養護教諭の役割の明確化とスクールカウンセラーの活用 千葉大学教育学部研究紀要，**61**，23－38.

原田克己 2009 教育臨床部門に関わる活動報告：平成15年度から平成20年度までの取組 教育実践研究，(35)，71－77.

石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房

石隈利紀・飯田順子 2006 各学校段階における援助チームと校内支援委員会の実態：援助チームの形成・維持に影響を与える要因に焦点をあてて 筑波大学学校教育論集，**28**，29－44.

神田橋條治 1990 精神療法面接のコツ 岩崎学術出版社

春日井敏之・大日方重利 1998 登校拒否・不登校児の担任教師への支援の在り方に関する研究：スーパーバイザーからの支援を中心に 大阪教育大学教育研究所報，**33**，33－43.

萱原道春・木戸陽子 2000 養護教諭とスクールカウンセラー 金沢大学教育学部紀要（教育科学編），(49)，15－29.

佐藤仁美 2006 スクールカウンセラーと教師の協働 心理臨床学研究，**24**(2)，201－211.

佐藤由佳利・小田切亮・木下弘基 2006 附属中学校におけるスクールカウンセリングのあり方について 北海道教育大学教育実践総合センター紀要，(7)，21－27.

清水祥子 2011 居心地のよい教育相談の場をめざして 金沢大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻修了研究報告書.

田村節子 2003 スクールカウセラーによるコア援助チームの実践 教育心理学年報，**42**，168－181.

田村節子 2008 保護者が援助チームのパートナーとなるためには，援助チームメンバーのどのような関わりが有効か 学校心理学研究，**8**（1），13－27.